



③日本軍の洞窟陣地入り口。
④米軍上陸11日後、ペリリュー飛行場には米軍の飛行機が並んでいる。そこには数日前まで日米両軍が死闘を繰り広げた跡はない。
⑤終戦から2年後、当時の永井さん（一番左）。
⑥陸軍第十四師団歩兵第二連隊の一部隊員。
⑦ペリリュー島には、戦闘により、ひっくり返ったままの戦車が現在も残る。

(写真) 水戸二連隊ペリリュー慰霊会提供

「戦争を経験した人が少なくなっていますからね。だから私は次の世代に知ってもらうために戦争とは何か伝えたい。戦場は想像がつかないほど、悲惨なものだから。」そう語って、永井敬司さんは当時の様子を伝えてくれました。

故郷を守るため、家族を守るため、ペリリュー島での約2か月半の戦いは続きました。11月24日、日本軍は戦闘継続不可能

と判断し、降伏することになった。永井さんは、戦後、家族を守ることができた。多くの命がなくなっていたのです。勝っても負けても、多くの犠牲をはらった。敵にも家族があったのだと思うと、こんなに悲惨なことではないと思います。米兵の中にあって同じことを思った人はいたんじゃないですか。」

部隊の生き残りは永井さんを含めてわずか34人。町内出身の犠牲者もおよそ35人に及びました。国や家族を守るために、命を犠牲にしたのは、多くが20代の若者でした。

「亡くなった人のことを考えると言葉にもできません。だから私は若い人に伝えたい。今の世の中のことをきちんと分かってほしいと。美味しいものを食べることができて、恐怖に脅える



⑧ペリリュー島南端の西太平洋戦没者の碑。(写真) 水戸二連隊ペリリュー慰霊会提供

戦争はこの世の中に 厳しくて悲しいことはない

戦争を経験した人が少なくなっていますからね。だから私は次の世代に知ってもらうために戦争とは何か伝えたい。戦場は想像がつかないほど、悲惨なものだから。」そう語って、永井敬司さんは当時の様子を伝えてくれました。



①

「当時は日本が軍国主義であり、『国のために』という教育を受けていたので、軍人一家であった親戚などの影響もあって、自分も志願をしました。20歳を迎

えたとみな徴兵検査を受ける時代でしたから。」入隊後の訓練を受け昭和15年9月、宇都宮の五十九連隊と高崎の十五連隊とともに満州に渡りました。永井さんはそこで、国境警備と情報収集の任務にあたります。

「自分たちはどこに行くのか全く分からずただ船に乗りました。上層部にしか情報は知らされていなかったんです。着いてみてやっとパラオにきたのだと分かりました。島に着いた後は昼も夜も休みなく陣地構築をしました。ペリリュー島は緑が茂り、海がきれいな島だったんです。」

昭和19年(1944年)4月、日本は関東軍の精鋭部隊と言われた第十四師団をパラオに派遣し、ペリリュー島(パラオ諸島南西部に位置する小島)には歩兵第二連隊などが送り込まれました。

第二次世界大戦 ペリリュー島の戦い

元陸軍軍曹 永井敬司さん

8月15日、日本は終戦記念日を迎えます。戦争を遠い過去のように感じる人もいるでしょう。しかし、戦争を体験した人は70年以上経った今も、当時の記憶が鮮明に蘇るのです。その声を皆さんにお届けします。「平和とは何か」もう一度考えてみませんか。



②米軍により爆撃されたペリリュー島。木々がなくなり山肌が見えている。(写真) 水戸二連隊ペリリュー慰霊会提供